

TOHOKU GAKUIN ARCHIVES

# 東北学院資料室

## LIFE

## LIGHT

## LOVE

Vol. 3

2003.12.31



### 同窓会「会員名簿」

東北学院同窓生をほとんど網羅した「会員名簿」は、1935(昭和10)年12月1日発刊から始まり、改訂版を重ねながら現在も定期的に発刊されている。これまで刊行された名簿の厚さからも会の発展が伺える。



学校法人東北学院



# CONTENTS

ごあいさつ	東北学院長 倉松 功	1
『杉山元治郎と東北学院』		
— 大正デモクラシーの実践的体現者 —	岩本 由輝	2
— 一枚の写真 — 奥太一郎とその周辺 —	久保 忠夫	8
ヨゼフ・ピタウ大司教のご来校		14
第4回ホームカミングデー『同窓祭』		16
— 懐かしい出会いがそこにある —		
東北学院大学文化講演会		18
— 初の試み、秋田県で開催 —		
東北学院同窓会主催100周年行事		19
◆英国イートン・カレッジ聖歌隊公演		
◆第24回TG交流カクテル&ビアパーティー		
◆オクタビアン・チャリティ・コンサート		
◆松岡佑子氏記念講演会		
◆記念礼拝		
◆平澤大学校音楽学科教授による記念演奏会		
◆記念式典&記念パーティー		
高山セミナーハウスの思い出	佐藤 裕治・太枝子	28
2003(平成15)年度時事		30
東北学院資料室規程(改正)		32
資料室来室・利用状況		33

## ラーハウザー記念東北学院礼拝堂

1932(昭和7)年完成。横浜のJ.H.モルガンの設計。鉄骨鉄筋コンクリート造秋保石張りの地階付き二階建で、総建坪数481坪。様式はカレッジ・ゴシック式。内部には米国モーラ社製パイプオルガン、英国製ステンドグラスなど外観内部とも聖堂として目目に値した。



## 「東北学院資料室」第3号 発行にあたって

東北学院長 倉 松 功



東北学院資料室は、2001(平成13)年5月15日(本学院創立記念日)にラーハウザー記念礼拝堂の地階に開設されました。本資料室は東北学院全体の歴史と伝統を将来に伝承するとともに「東北学院の創立の精神」に関する資料を収集・保存・展示し、東北学院の発展に資することを願うと同時に、学院の歩みを内外に示す目的として設置されました。以来、同窓生をはじめ内外多数の方々の見学をいただき、感謝申し上げます。

展示内容は、本院の三校祖の押川方義、W.E.ホーイ、D.B.シュネーダーを中心とした常設展示(約200点)が中心となっております。三校祖関係に続き、本年から数年の予定で「大正デモクラシーと東北学院」のテーマを掲げ、資料蒐集を行うことになりました。わが国の民主主義・社会主義の歴史において独自の貢献をした元理事長杉山元治郎、同鈴木義男をはじめ、大正デモクラシー、社会・農民運動などについて明治・大正・昭和の時代に活躍した先人たちの足跡を掘り起こすプロジェクトもスタートしました。

その他、本年行われた下記の資料も展示いたしました。本学院同窓会100周年記念イヤーとして英国イートンカレッジ聖歌隊による公演、オクタビアン・チャリティーコンサート、ハリーポッターの翻訳者の松岡佑子氏による講演会、記念礼拝、平澤大学校芸術学部による演奏会、記念式典や江陽グランドホテルでの600人の出席による着席の記念パーティーなど

のパネル展示、6月にはローマ法王庁からピタウ大司教の来校があるなど100周年記念に相応しい一年となりました。

また、10月には恒例となりました第4回ホームカミングデー(同窓祭)が大学祭とともににぎやかに開催され、多くの同窓生が学生との交流を図ることができました。秋には、大学として初めての仙台以外での「東北学院大学文化講演会」が秋田市で同窓会支部の協力を得て成功裡に行われました。

本学院は今年で117周年を迎え今後の営みにとって重要な年であるといえます。それは法科大学院が開設され、文学部英文学科・史学科の新体制、教養学部の四学科制などが明年設置されるための重要な準備の年だからです。

さらに新しく協定校となるオーストラリアの二大学(シドニー大学、ニューサウス・ウェールズ大学)、カナダ・ヴィクトリア大学、フランス・サヴォア大学との相互交換留学の準備もあります。

東北学院資料室では、先人たちの熱い祈りとその献身犠牲により今日の東北学院があることを今に伝え、ご紹介いたします。この信仰的遺産と学問的良心を忠実に継承してまいります。



# 杉山元治郎と東北学院

—大正デモクラシーの実践的体現者—



東北学院大学経済学部教授

岩本 由輝

## 1. はじめに

現在、高等学校の日本史Bの教科書は19点あるが、そのなかの8点に登場する本学出身者がいる。1909年3月、本学神学部別科を卒業した杉山元治郎である。その一例を挙げると、大正デモクラシーの項に、

“恐慌のしわよせは、小作人の打撃がもっとも大きく、全国各地で小作争議がしきりにおこり、小作人組合が設立された。こうしたなかで、キリスト者賀川豊彦(1888～1960)・杉山元治郎(1885～1964)らは、1922年、全国組織の日本農民組合を神戸で結成し、小作人の地位向上を目標に運動をすすめた(『詳解日本史B』改訂版、清水書院、1997年2月)”

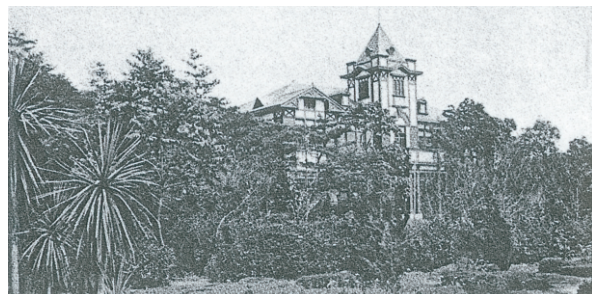
という形で日本農民組合の創始者として登場する。賀川と杉山はきわめて深い関係にあるが、知名度では賀川の方が高いようにも思える。しかし、教科書への登場数は、それぞれ仲良く8点ずつとなっている。

杉山の本学との関係は単に卒業生というだけでなく、深いものがある。本学の第5代理事長として1944年6月から1947年7月20日までと、第7代理事長として1963年9月6日から翌年10月11日の長逝の日まで務めているのである(『東北学院百年史』学校法人東北学院、1989年5月、1336、1343頁)。

## 2. 出生から成人まで

杉山は、1885年11月18日、大阪府日根郡下瓦屋村(のち、日根郡北中通村、泉南郡北中通村、現泉佐野市)で父政七・母具満の長男として生まれる。祖父の代には手広く事業をやったこともあったようであるが、杉山が物心がついた頃には豊かとはいえず、自分の家で作った野菜を杉山が尋常小学校の往きに八百屋に運び、帰りに代金と籠を貰って帰るといった状況にあった。自ら働く農民の子供であったという意識は、こうして培われたようである。

耕地整理法が制定された翌年の1900年4月、杉山は給費制のある甲種の大阪府立農学校農科(現大阪府立大学農学部)に入学し、1903年3月に卒業するが、在学中の1902年9月21日、大阪市南区南綿屋町(現大阪市中央区島之内一丁目)にあった日本基督



杉山が学んだ勝山時代の大阪府立農学校(1890年～1926年)

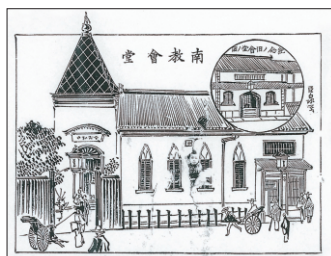
教会大阪南教会(現在は吹田市に移り、日本基督教団大阪南吹田教会となる)で牧師皆田篤實から受洗し、クリスチャンとなっている(『大阪南教会五十年史』日本基督教会大阪南教会、1935年12月)。学校では杉山は内村鑑三の信奉者であった教諭布施常松から多大の感化を受ける。

卒業後、杉山は、1903年11月10日に和歌山農会の技手兼書記として採用されるが、その直前の10月に農商務省が農会に対する論達として農事改良



写真上:衆議院副議長時代の杉山元治郎(1957年)  
写真下:現在使われている高等学校教科書(杉山がとりあげられている)





大阪南教会



同教会牧師皆田篤實

必行事項14項目を打ち出しており、杉山もその普及に動員された。しかし、杉山はその仕事に没頭することはできなかった。和歌山市で加藤一夫が同人雑誌『真紅』を発行したとき、杉山は発行人となっていたが、『真紅』同人には『平民新聞』の愛読者が多く、日露戦争さなかの1904年中に和歌山市で開かれた『真紅』記念講演会において、登壇した弁士の多くが非戦論を唱えたことから問題となり、杉山は上司から辞職を勧告される。こうしたことがあって、当時通っていた和歌山市三木町の日本基督教会和歌

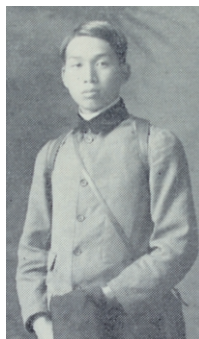


和歌山市三木町日本基督教会

山教会（現在は日本基督教団和歌山教会として和歌山市雑賀町にある）の牧師滝本幸吉郎に、1905年2月11日、伝道生活に入る決意を語り、同年8月、和歌山農会を退職する。なお、この和歌山教会に、後年、杉山を世に送り出すにあたって重要な役割を果たす沖野岩三郎が副牧師として務めていた。

### 3. 東北学院神学部別科に学んで

こうして杉山は東北学院神学部に入るために、いくばくかの退職金を持っただけで、1905年8月に仙台にやってきた。東北学院を志望したのは、東北学院がジャーマン・リフォームド・ミッションに属することから、「新しい独逸神学」を学ぶことができることにあったが、労働会に入れば、働きながら勉強ができることも魅力であったといっている。そして、1906年4月に東北学院神学部別科に入学している。当時の学院長は2代目のデイヴィド・B.シュネーダーであったが、杉山はキリスト教信仰に基づく人格主義教育の理想に燃えたシュネーダーの知遇を得ることになる。別科とは、今でいう社会人入学のようなもので、さまざまな経歴の学生がいた。生え抜きの普通科出身の多い神学部は英語で、別科は日本語で講義が行われる



東北学院時代



当時の東北学院

ところに特徴があった。杉山は『真紅』の主宰者の加藤からの援助と外国人教師に日本語を教えることで学資をまかなうことができたので、労働会には入らなかった。杉山は日曜日には東六番丁教会に通っていた。



二代院長 D.B.シュネーダー

最初の夏休みに、杉山は7月9日から8月22日まで無銭伝道旅行を行い、野宿をすることもあったが、8月4日から5日にかけて富士登山をしている。こうした旅行を敢行できたのも、若さゆえである。また、1907年4月27日、救世軍の創始者ウィリアム・ブースが仙台を訪れたとき、その風貌に接した杉山は神に仕える決意を新たにす。そして、同年9月3日、農学校時代の旧師の布施からメキシコに来るようにとの勧誘の手紙を貰ったことで、杉山は卒業後、メキシコでの伝道活動に赴く気持を固める。このあと杉山は、1908年2月21日、級友たち4人とクロス隊（十字架隊）を結成し、毎夜東一番丁の当時の藤崎呉服店前の広場で街道説教を始める。このときの思い出として、杉山は狼三次というスリの親分を改心させ、生涯にわたって正業に就かせることができたといい、この一事だけでも街道説教をした甲斐があったと追懐する。杉山は単に神の道を説いて改心させただけでなく、元親分に砂糖を溶かしてブリキの型に入れ、ベッコウ飴を作る技術を与え、それを屋台や行商で売らせたが、それが成功したのである。杉山にはそのような器用なところがあった。

1908年5月21日、卒業年次の3年生になった杉山は学院長のシュネーダーを訪れ、卒業後、メキシコで伝道活動に従事したいと告げるが、シュネーダーは杉山に対して日本での伝道活動に従事するように諭している。こうして日本での伝道活動に従事することを決意した杉山は、夏休みに入って7月13日から和歌山まで往復45日間の伝道活動を行ない、10月11日からは東北各地で伝道活動を進める。そして、1909年3月、杉山は卒業する。



#### 4. 東六番丁教会と療養生活

杉山は、1909年3月、卒業と同時に在学中に通っていた東六番丁教会の牧師となり、同教会内の牧師館に住みこむ。当時、同教会には牧師がおらず、東北学院の教授たちが日曜ごとに交代で説教を行っていたが、教勢がふるわず閉鎖の話も出ていた。そのような教会に、杉山は牧師として志願したのであった。支払われる月給はわずか1円50銭であった。沖野は杉山を「一円五十銭の牧師」と呼ぶが、それは、本来、このときのこと由来する。あまりの薄給に信者たち



東六番丁教会

が気の毒がり、杉山は各家庭の廻り持ちで食事を供されるというありさまであったが、とにかく教勢は漸次回復し、礼拝にも相当数

の出席者がみられるようになった。しかし、杉山が倒れてしまう。

最初は風邪と思っていたが、ひと月経ってもなおらず、午後になると熱が出る。そして9月26日、医師の診断を受けると、肺浸潤ということであった。肺結核の初期的段階である。そこで杉山は、東六番丁教会を別科の同級生菅井喜七に託し、生家に帰るため、11月6日、仙台を去る。そして、11月17日、大阪市島ノ内の長春病院で診断を受けると、かなり病状が進んでいるとのことで、数日入院したが、自宅療養ということになり、週1回、結核専門の石神病院で診察療養を受けることになった。杉山は、そこで入院患者に精神講話や伝道説教を行っている。

1910年1月30日、転地療法がよいということで和歌山県に行き、2月3日から24日まで湯崎温泉（現白浜温泉）に滞在する。その後、自宅療養を続けたが、ほとんど全快したので、もう一度東北に来るようにとのシュネーダーの勧めに従い、5月6日に仙台に戻っている。

#### 5. 小高教会と自給伝道

仙台に戻って来た杉山を、シュネーダーは福島県相馬郡小高町の日本基督教会小高教会の牧師として推薦する。その頃まで小高講義所と呼ばれていたそこには、シュネーダーによって1902年12月20日に受洗した高橋キヨ・大井安吉・橘藤七・鈴木良雄、1905年2月26日に受洗した佐藤吉之助、同年12月17日に受洗した原田兼太郎・鈴木雄八らの信者がいた。相馬地方は東北といっても比較的冬も温かいところである。信者の数も少ない小さな教会であったから、負担もあまり大きくないという判断もあったのである

う。杉山の健康を考えての配慮である。1910年7月10日、杉山は赴任し、小高教会と称するようになる。教会といっても、単身赴任の杉山は南小高の林フヂという信者の家に下宿し、当面そこを集会場としたが、林は『末摘花通解』などの著者大曲駒村（省三）の妻ツルの姉である。なお、大曲夫妻も小高教会の信者であった。給料7円を伝道局から支給されている。



小高教会時代

小高町は中村藩相馬氏の先祖重胤が、1322年に本貫の地である下総相馬郡から移り、1326年から居城を置いた古い町である。相馬氏は近世に入り、1611年に居城を中村（現相馬市）に移すが、小高町には近世の城下町である中村町に対して独自の文化的誇りを持っているところである。杉山が赴任した頃は輸出向羽二重織の産地として注目されていた。

杉山が小高町に着任して間もない7月18日には、杉山の最初の著書『福音物語』（中庸社）が上梓される。また、9月21日には仙台の中村こと、と結婚するが、しばらく別居生活を余儀なくされる。1911年になり、教会を空屋になっていた医院のあとを借りて移し、そこに住むとともに、10月14日、妻のことを仙台から迎え、生家から妹棄子を引き取っている。この場所は、第2次世界大戦後、小高町農業協同組合の事務所が置かれたところという。

赴任当時の杉山について、シュネーダーによって受洗した鈴木良雄の長女で、杉山の推薦で宮城女学校（現宮城学院）の給費生となった1901年4月10日生まれ、鈴木てる（憲法学者鈴木安蔵の姉）は、1966年2月発行の『農村だより』第2号所載の「杉山元治郎先生とわたし」において、

“赴任当時の先生は病後であられただけに、蒼白な顔、やせ細った身体に、短い袴、高下駄という青年牧師でした。私の亡父時代から一時は土田牧師を迎えクリスマスなどがかなり盛んに催されたこともあったが、専任牧師なく信者の大方は死亡し、ほとんど教会の形すらなく、私達日曜学校の生徒も十人たらずであったと思う。

それも当時の「耶蘇」への特別な目と、「あの先生は肺病だ」という無理解な人々の声にはばまれがちでありました。しかし、大阪訛と仙台弁の早口で話してくださる先生の説教には熱がこもり、しかもある時は童話を、ある時は魅せられるさまざまなお話に童児の心の奥底に入れようとする先生の御苦心に心を打たれたものであり、それだけに、先生の神の教へにみたされた、あの温顔あふるゝ人柄を追憶せずにはおれません。当時



の私達には、花の絵のかゝれた聖句カードも魅力の一つであったけれども、やきいもやの奥さん（当時、私たちは、先生の奥さんをそう呼んでいた）が帰りぎはに、「そうら、あついやきいも食っていがい」と荒れくろづんだ手で渡された、やきいもの温さ、五十余年の今日まで私たちの手に残っているように思います。当時、私たちは何も知らなかったが、先生の最も苦難な時代にもかゝらず、どんな苦難にも苦渋にも笑顔を絶やさなかった先生御夫妻、そして、家庭を解放してあらゆる人々を包容し、青年があつまられ、みづからも青年となり、詩人の集いにも開放し、詩をうたい、決して宗教的な雰囲気や強要されることはなかった。

先生の信仰の強さは、言葉の説教ではなく行動であった。最近、小高教会牧師佐藤仁先生のあつめられた写真のなかに、……という旗をたて楽隊をつくり、その中央に先生、そして、そのはしっこにわたしが写っているのを見て、街道で太鼓をたゝき説教されている先生の姿、そして、「そら耶蘇の太鼓がなる」という人々のさゝやきが想いおこされます。”

という回想を行っている。

しかし、保守的な町での布教を思うにまかせなかったが、思いがけないところから杉山と地域農民との交流が進む。相馬郡金房村（現小高町）大田和に安藤平松と渡辺チセという数少ない信者が住んでいたが、安藤は1907年8月22日に東北学院の創始者の1人ウィリアム・E・ホーイによって受洗した古い信者であったので、赴任当時の杉山はしばしばそこを訪れた。その際、途中の同村飯崎地内に良さそうな土地なのに萱が生い繁っている広い土地があった。聞いてみると、幕末に二宮尊徳



W.E.ホーイ

の高弟で、中村藩家老の富田高慶が推進した興農仕法による荒地開発の際にも、着手されながら、ものにならなかったことから、「尊徳先生の御仕法でも駄目だった」ということで放置されていることであった。農学校出身で農会技手の経験もある杉山は、ここに1反歩の土地を年5円で借り受け、葡萄や桃や梨の苗木を植え、また、この地方では初めてとされる玉葱やキャベツの種子を蒔いてみた。果樹はすぐに収穫があったわけではないが、杉山の予想より生育がはるかに速く、野菜の方はすぐに成果が現われ、附近の農民たちは大いに注目し、手入れをしている杉山に話かけてくるようになる。そして、杉山の経歴を知った農民のなかから、杉山を訪ねて来て、口ごもりながら、「耶蘇の話は抜きにして農業の話だけ

しに来てくれ」と頼む者が出てくる。杉山が快く応ずると、あちこちから同様な注文が来るようになる。無給の農業改良普及員のようなものであるが、杉山は肥料の話をして喜ばれている。当時、それまでの刈敷・堆肥といった自給肥料にかわって、

葡萄栽培のしおり (1911年)

日	内容	金額
一月一日	...	...
一月十日	...	...
一月二十日	...	...
一月三十日	...	...
二月一日	...	...
二月十日	...	...
二月二十日	...	...
二月三十日	...	...
三月一日	...	...
三月十日	...	...
三月二十日	...	...
三月三十日	...	...
四月一日	...	...
四月十日	...	...
四月二十日	...	...
四月三十日	...	...
五月一日	...	...
五月十日	...	...
五月二十日	...	...
五月三十日	...	...
六月一日	...	...
六月十日	...	...
六月二十日	...	...
六月三十日	...	...
七月一日	...	...
七月十日	...	...
七月二十日	...	...
七月三十日	...	...
八月一日	...	...
八月十日	...	...
八月二十日	...	...
八月三十日	...	...
九月一日	...	...
九月十日	...	...
九月二十日	...	...
九月三十日	...	...
十月一日	...	...
十月十日	...	...
十月二十日	...	...
十月三十日	...	...
十一月一日	...	...
十一月十日	...	...
十一月二十日	...	...
十一月三十日	...	...
十二月一日	...	...
十二月十日	...	...
十二月二十日	...	...
十二月三十日	...	...

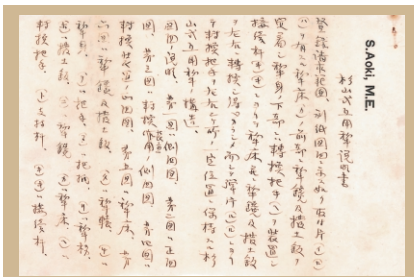
葡萄栽培のしおり (1911年)

な金肥、さらには化学肥料なども入り始めていたが、それら新しい肥料の成分についての知識がないまま、どちらかという肥料過多になり、かえって減収になるということが起きていた。杉山の話で肥料を減らし、経費を少なくして収量が増えるのであるから、農民たちから感謝された。

それと相馬郡では1905年以来、歴代郡長の指導で耕地整理が進み、その結果としての乾田化とともに牛馬耕の導入が緊急の課題となっており、その相談も持ちかけられた。農事改良必行事項14項目が相馬郡でも実施されようとしていたのであり、それは、場合によっては駐在巡査による強制をともなったことからサーベル農政とも呼ばれていた。

このようななかで、杉山は1913年2月、教会内に農民高等学校を開設する。これはデンマークのH.ホルマンの著書を東京帝国大学農科大学教授那須皓が翻訳した『丁抹の国民高等学校と農民文明』に着想をえたものであった。しかし、ちょうどその頃、杉山の健康がすっかり回復したことをシュネーダーを通して知った伝道局から杉山にもっと信者の多い教会に転任するかアメリカに留学するか、という好意的な誘いがあったが、せっかく地域農民とのつながりもでき、「たまに耶蘇教の話をして下さい」と農民から切り出されるようになり、農民高等学校を始めたばかりでもあったので離れがたかった。また、杉山は当時、日本人への伝道は、外国の伝道局の支援を離れ、日本人の手で行うべきであるという植村正久らの自給伝道の運動に共鳴していたから、苦難の道であることは知りながら、先の好意的な誘いを断わり、1914年1月からは伝道局から独立して自給伝道に入っている。そして、そのために杉山は小高町片草地内で田2反（20アール）と畑1町（1ヘクタール）を借り受け準備をしたが、これだけの耕地を経営すれば、もはや立派な農民である。2月には故郷から父政七と義母民江（実母具満は杉山が5歳のとき死去）と弟政雄を呼び寄せる。杉山の健康は完全に回復して





杉山式互用犁説明書 (特許申請書類の控)

いた。この間、杉山は地域農民に画期的な貢献をすることになる杉山式互用犁の特許をとる。先にもみたように、当時、相馬郡では耕地整理事業が進み、牛馬耕が導入される必要が生じていたが、市販の犁は高価で農家にとって入手が大変であった。しかもそれは、一方にしか土を反転できないので、1うねごとに空戻りして新たなうねを反転しなければならないという、能率の悪いものであった。そこで、杉山は互用犁といって往復ともに同方向に土を反転できる犁を考案したのである。杉山は農学校出身で、農会技手を務めたという経歴があるだけでなく、実に器用な人であった。杉山の特許申請を行ったときの控から、その一部を示せば、

#### 杉山式互用犁説明書

登録請求範囲 別紙図面ニ示ス如ク、取付片(イ)(ロ)(ハ)ヲ有スル犁床(カ)ノ前部ニ犁鏡及撥土飯ヲ定着シ、犁身ノ下部ニハ転換把手(ヘ)ヲ装置シ、接続杆(キ)(キ)ニヨリテ、犁床并ニ犁鏡及撥土飯ヲ左右ニ転換シ得ベカラシメ、而シテ弾片(ル)(ル)ニヨリテ転換把手ヲ左右ニヶ所ノ定位置ニ保持スル杉山式互用犁ノ構造。(以下略)

のとおりである。杉山はこの特許をとると、近所の鍛冶屋にこれを造らせ、農家に実費で提供している。とにかく、杉山は農民にとって当時とすれば素晴らしいハイテクを有していたのである。

ところで、杉山が自給伝道を始めると、教会には日本基督教会小高教会の看板と並んで、「種苗取次販売」「農具一次取次販売」「売葉取次販売」「相馬焼取次販売」「杉山式互用犁」「杉山式自転車修繕器」などの看板が所狭しと並べられるようになる。また、教会の入口には焼芋釜をすえて、夫人のことが焼芋を売っていた。沖野の『八沢浦物語』(金の星社、1943年10月)には、1906年から相馬郡八沢村(現鹿島町)で干拓事業を進めていた山田貞策が杉山を訪ねたときのこととして、

“ある日曜日に相馬郡の小高町に行つて、停車場の近くで、このへんに教会がありませんかと聞いてみますと、一町ばかり行つた所に教会があることを教へてくれました。で、山田さんは教へられた所をたづねましたが、教会らしい建物はありません。二度も三度も同じ町内を行つたり来たりしましたが、たづねあたらなないので、また元の家に

行つてきいてみると、あの焼芋屋が教会ですと言ひました。”

という話が紹介されている。

また、1町の畑と2反の田を耕やすことも半端な仕事ではない。豚や鶏も飼っていた。畑でとれた野菜を売るために、杉山は荷車を引いて町内をまわった。夫人のことも花や焼芋をもって町内を流して売り歩いた。自給伝道を口でいうのはたやすいが、実際に家族5人が食べていかなければならないのであるから、真剣であった。しかし、杉山はこうしたなかでも農民の種子の選択や病害虫の駆除についての相談に快く応じてやった。農民高等学校の方も本校だけでなく、相馬郡大甕村(現原町市)、同郡鹿島町、同郡八沢村

(現鹿島町)、双葉郡幾世橋村(現浪江町)に毎月定日に出かけただけでなく、



八沢浦講義所 (1911年)

小高町周辺の金房村(現小高町)金房や大田和、福浦村(現小高町)女場や吉名を巡回して臨時の教室を開いている。1916年8月、杉山はこれらの経験を取り入れた『農業経営の実際』(洛陽堂)を著している。

ただ、杉山はこうして農民に接触するうちに、ひと口に農民といっても、地主・自作・小作という階層があり、その間に厳しい対立があることを実感する。地主と小作の対立は深刻であった。耕地整理が進むと、縄伸びがなくなる。しかし、地主は小作に従来通りの反当小作料を求めたから、小作料の実質的な引き上げとなった。小作は小作料の引き下げを求めるが、地主は土地取り上げで対抗する。そこで小作は耕作権の確保を求めて小作争議となる。杉山の近辺でも、はっきりした動きはみえなかったが、問題は発生していた。また、山田貞策との関係で杉山が顧問格になっていた八沢浦干拓株式会社でも、干拓の成功とともに、事業主は地主根性を発揮する。こうしたとき、自ら働く農民の子供であったという意識をもった杉山は小作の味方をする。それは東北学院で身につけたプロテスタントの精神であった。杉山は土地と自由のために、大正デモクラシーの実践的体現者としてやがて立ち上がることになる。

杉山は、1917年1月2日から小高教会の教会堂建設資金の寄付募集に着手した。ヘブライ学者の左近義弼から杉山の自給伝道を耳にした森村組の森村市左衛門が700円の寄付をしてくれた。森村はノリタケ・チャイナで知られる日本陶器株式会社の創設者である。杉山も自ら900円の借金をしている。小高教会の



教会堂は、現在地に同年中に落成し、12月25日のクリスマスを盛大に祝っている。

そのような杉山に転機が訪れたのは、1918年11月の雑誌『雄弁』（第9巻第12号）に、沖野岩三郎が「日本基督教会の新人と其事業」を掲載し、賀川の神戸市にお

ける貧民救済と杉山の小高町における自給伝道をとりあげたときである。沖野は、

「私は極端なる程熱狂な賀川豊彦を紹介すると同時に、冷静温厚な新人杉山元治郎を紹介したい。賀川が関西の繁華なる神戸の地に居るに引換へ、杉山は東北の地磐城の片田舎に住んで居る。賀川が瘦身短軀なると杉山が六尺に近き長軀なると、賀川が熱烈にして激越なると杉山が温容にして冷静なると、賀川の事業が凄愴悲惨なると杉山の事業が平穩無事なるとの相違はあるが、其の胸中に貯へている教界新人の血には大して徑庭がない。」と書いている。この論稿をきっかけとして、賀川と杉山は結びつけられることになり、杉山に土地と自由のための運動を全国的に展開させようとする気持を抱かせる。



杉山が建てた当時の小高教会



雑誌『雄辯』（第9巻12号）

杉山は、1920年10月4日、小高教会を辞して、大阪に転住し、神戸市葺合新川（現葺合区）に賀川を訪れる。

## 6. むすびにかえて

この後、杉山は1921年10月17日、農民組合の結成について賀川と協議を行い、1922年1月27日にやがて日本農民組合の機関紙となる『土地と自由』第1号を刊行し、4月9日に神戸市で日本農民組合創立大会を開き、初代組合長に選ばれているが、そこにいたるまでの過程とその後の展開については、あらためて述べる機会を得たい。

なお、杉山がいかに器用な人間であったかという1つの話を挙げておこう。杉山が小高町に行った頃、そこには歯医者がいなかった。そこで教会を旧医院



日本農民組合創立大会における杉山元治郎（1922年）

あとに移してからのある夏、藤田仁助という東京で開業していたクリスチヤンの歯医者を選りかてらに呼んで来て、教会の一室で出張診療を行わせた。町民や付近の村民からも大変評判がよく、盛況であったことから、藤田も小高町が気に入って、東京を引き払って小高町で藤田歯科医院を開業した。杉山が行ってみると、いつも夜遅くまで技工をやらねばならないほど、繁昌していた。そこで杉山は見よう見真似で技工を手伝い、金冠の蠟づけなど、藤田も感心するほど上手に行えるようになっていた。杉山は、このときの経験を生かし、小高町を去ってからであるが、何度かにわたって歯科医検定試験を受け、ついに1924年10月20日に試験に合格し、12月に歯科医師として登録されている。そして、杉山は1930年3月1日に大阪府中河内郡布施町東足代（現東大阪市）で杉山歯科診療所を開業している。農民運動もまた杉山にとって自給伝道の一環であったのかも知れない。



杉山歯科診療所にて（1930年）

杉山は戦前

から戦中にかけて3期無産政党内閣から衆議院議員に当選している。戦後は翼賛選挙で大政翼賛会の推薦を受けたことから公職追放となるが、追放解除後、日本社会党から5期連続、衆議院議員になっている。そして、1955年から衆議院副議長を3年4か月にわたって務める、いわゆる55年体制は杉山が副議長であったときに実現する。しかし、その55年体制も1993年5月に崩壊してからすでに久しいことを最後に記しておこう。

岩本 由輝プロフィール IWAMOTO, Yoshiteru

1937（昭和12）年生まれ  
東北大学経済学部卒業  
山形大学人文学部講師・助教授・教授を経て  
東北学院大学経済学部教授となる



## 一枚の写真

— 奥太一郎とその周辺 —

東北学院大学名誉教授  
久保 忠夫

## 1

『東北学院七十年史』（昭和34・7 東北学院同窓会）の101ページに一枚の写真が掲載されている。はじめ、背後の軍艦旗だけが目についた。そして、海軍に入る人の送別会の記念写真かぐらいの気持で見過ぎていた。それから少したって、この写真をよく見ると、「明治26年3月奥太一郎先生送別記念」と説明があった。これにはいささかならず驚いた。あの奥太一郎先生が東北学院に先生をしていたという意外とも喜びともつかぬ驚きであった。奥太一郎の名は漱石全集の書簡集総索引で「オ・ヲ」の部をひくときしばしば出合った名である。奥の名が記憶に残ったのは、奥保肇元帥の奥と結びついたためかも知れない。とにかく、漱石とかかわる奥太一郎が東北学院に教鞭をとっていたということは日本近代文学専攻の私には大きな関心事であった。写真の説明は「東北学院3年生及び教員、珍しいのは押川方存（後の春浪）のいることである。紐でしばった鞆をもっている」

と続く。「珍しく」とあるように、奔放な春浪が出ているので、奥先生は東北学院でも慕われる先生であったのではないかと思った。つぎに、この軍艦旗は後に『海底軍艦』や『武俠艦隊』の作をなした春浪の仕掛けたものではないかと思ったが、こちらは結びつけるのは無理。当時（もその後も）この旗は「日の丸」と同じに用いられていたし、陸軍の軍旗（連隊旗）も同様な意匠であったから当たらない。むしろ、この写真を撮ったのが三月の旗日（祝日）春季皇霊祭（今の春分の日）ではなかったかと推測する。説明はさらに、「奥太一郎は同志社出身の英語の教師で熊本（第五高等学校）に転じた。そこで夏目漱石と同僚だった」と展開して終わる。ここでありがたいのは奥が同志社の出身であることを、花輪庄三郎先生が書いておいてくださったことである。このことから奥太一郎が明治21年に同志社英学校普通科の卒業であることが明らかになった。ただ、これで読むと東北学院からただ



前列右から5人目が奥太一郎氏（上円内）。前列右から3人目は押川方存（春浪）（明治26年3月・奥太一郎先生送別記念）

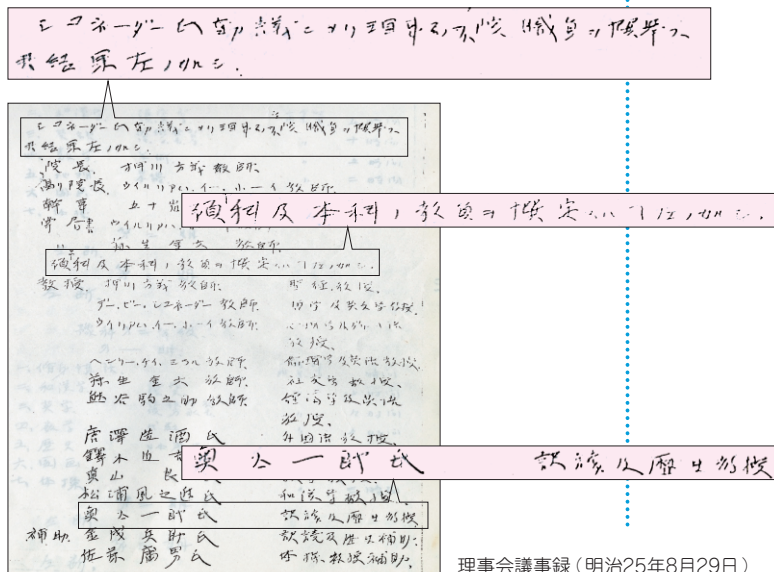


ちに五高へ行ったようにとれないこともないが、ただちに、ではないのである。それは後に書く。

東北学院に招かれたのは、仙台神学校が東北学院に新生する、その陣容をととのえるためであったと推しはかれる。根拠は

明治25年8月29日に開かれた東北学院の理事会において、東北学院のプランを議し、議決しているが、その中に「豫科及本科ノ教員ヲ撰定スル事左ノ如シ」として新任と認められる5人の教授を挙げるが、その一人に「奥太一郎氏 訳読及歴史教授」があるからである。また、11月14日に開かれた理事会で「下二記スル所ノ教授、補助及職員ノ給料全額ヲ定ムル事左ノ如シ」として列挙する中に「訳読及歴史教授 奥太一郎氏 全〔月俸〕金貳拾三円」とあることが、それをさらにたしかにする。東北学院は明治25年1月18日に開院式を挙げているから、奥はその頃仙台に来たものであろう。明治26年2月21日付で東北学院規則改正の認可を宮城県に願出ている。「今般本院規則改正致候ニ付御認可被成下度別冊相添此段奉願候也」。これは同年3月8日付けで許可されているが、その別冊であろう、「東北学院一覽」が県図書館に保管されている。その「教員」の中に、

訳読及歴史教授 奥太一郎（東京）  
があり、普通部の教員の中にも、  
訳読及歴史教授 奥太一郎（東京）



押川春浪と「海底軍艦」

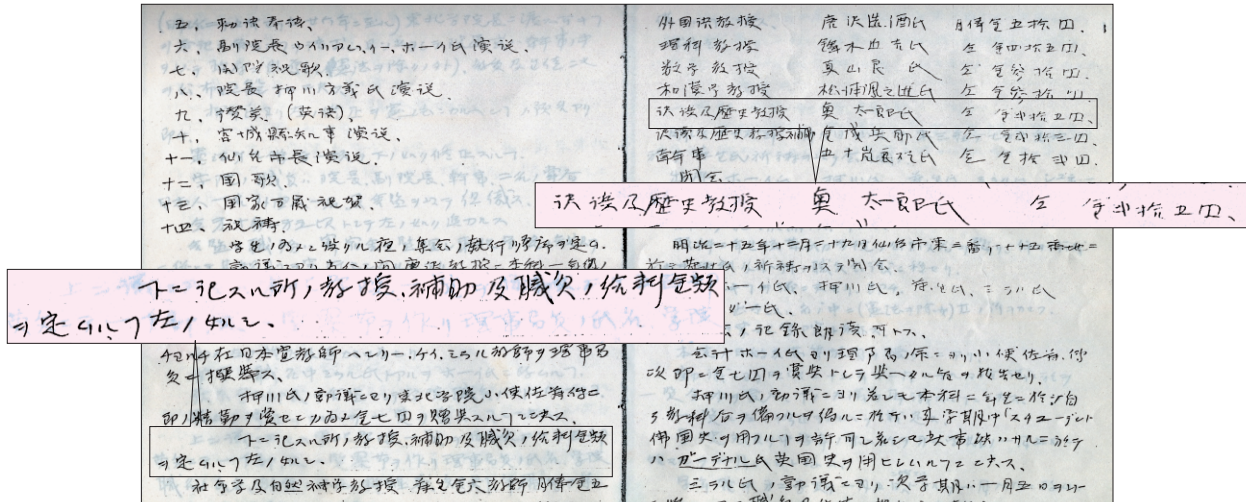
がある。許可されてその月のうちに東北学院を去るのであるから陣容をととのえるためとしか考えようがない。このときすでに奥の胸中には期するところ（後出）があったであろうから、はじめから長居はできなかつたと考えられる。それにしても、明治25年11月から翌年の3月までとはまことに短い期間であった。そして、どのような教育成果を挙げえたか、知るよしもないが、その離任に当たって、院長はじめ諸教授、職員、生徒が相集い、その行を盛んにしているところを見ると、別離の惜しまれるよき教師であったことは推測できる。

## 2

奥太一郎の第五高等学校（熊本）（以下、五高）に在職したのは、明治31年から大正3年までの「16年」間、くわしく言うと、明治31年4月4日に講師、10月11日付けで教授、大正3年2月6日に辞任ということになる。

大正3年2月8日付けの奥あて漱石書簡に「今度愈御辞任の上長崎の方へ参られる事になりたる由拝承致候」とあり、また、「長崎着の上は女子教育の方にて充分の御成効乍蔭切望致候」ともあるので、長崎で女子専門学校があるのは、と考え、そこから活水学院を割り出し、東北学院資料室の吉田知致さんに「『活水学院何十年史』とか、『活水学院百年史』とか言う本がありますね」とたずすと、即座に「あります」という答なので奥太一郎に関する部分があったら、コピーをしてくれるように頼んだ。それとともに活水学院女子大学に問合状を出した。両者先後はあるが、『活水学院百年史』（昭和55・3 活水学院）から、関係箇所のコピーが届いた。やはり、五高を退職して赴いたのは活水学院であり、ヤング校長の下で、教頭として女専設置に向





理事会議事録(明治25年11月14日)

けて活躍するのであった。上の漱石書簡に「愈」とあるので、この交渉は前からあったものと考えられる。そして奥は大正9年3月、ヤング校長の辞任とともに活水学院から九州学院に転ずるのであるが、ヤングの後を受けたホワイトを助けて赴任を3ヵ月延期し、女子専門学校設置の実現に努力する。

この『活水学院百年史』は奥太郎を知るに、最も重要な文献と思われる。それは、英文で書かれた『五十年史』からの引用と思われるが、次の記述を含むからである。

〔奥太郎〕は1870(明治3)年東京に生れ、1883(明治16)年京都同志社に学び、卒業後群馬県碓氷英学校教頭に迎えられ、これを振り出しに北越学館、東北学院等に勤め、1892(明治26)年帝国大学文科大学選科に入学して哲学を専攻し、中等教員免許状をうけた。1898(明治31)年第五高等学校教授に任ぜられ、在職16年正五位勲六等に叙せられた。その間1910(明治43)年には在職12年間無欠勤の故をもつて特に賞せられた程、精励恪勤の士であった。

これで、生れてから活水学院辞任までの50年の生涯が浮んで来る。まず、これによって奥の生年が明治3年であることがわかる。漱石は慶応3年の生れである。次に、生地がわかる。東京である。これは、上に述べた、明治26年2月の東北学院一覽に「奥太郎(東京)」とあるのとも符号する。奥の生地を水戸とする説もあるやにきくが、わたしは東京に定めた。第三に明治16年に同志社に学んだとあるが、奥は明治21年に同志社英学校普通科を卒業しているから、明治16年入学、5年の課程を経て明治21年に卒業したのと考えてよいであろう。卒業して初めての任地は当時の群馬県碓氷(うすい)郡原市(はらいち)村の碓氷英学校であったという。原市はいま安中市—安中は新島襄の出生地—になっているが、信越線の安中駅の西、磯部駅の東にあたる。群馬県にも明

治20年前後、各地に英学校が出来た。ほとんどが短命に終わった。碓氷英学校もその一つ。萩原進の『群馬県史(明治時代)』(昭34・12 高城書店)によると、明治19年9月に開校(推定)、21年8月30日には知事宛に廃校の上申がなされている。奥は卒業すると、この学校に赴いた。明治22年撮影に奥と生徒の写真が残っている。中央に奥、左右に二人ずつ生徒、前に三人生徒。「西毛時事」(明22・7・15)が載せる22年4月の生徒数は本科生32名、員外生4名(設立準備段階での概則では「大約70名」)。どのような学校であれ、これが奥の教員生活の第一歩を印したところである。これから新潟市の北越学館に移り、東北学院に転じたと思われるが、その間にどこかで教鞭をとっていたかも知れない。

### 3

『国史大辞典』の「西田幾多郎」の項に「〔明治〕24年9月から帝国大学文科大学(のちの東大文学部)哲学科選科に入学し、井上哲次郎・ブッセ・ケーベルらに学ぶ。同27年7月同校同科を卒業」とある。とすると、奥が選科生となったとき、西田幾多郎は選科の3年生だったことになる。また、本科と選科の違いはあっても、明治26年に入って明治29年に卒業した者に、桑木巖翼、姉崎嘲風、高山樗牛らがいる、「之を文科大学では豊年組と云って居る」(登張竹風)という盛時であった。奥が岡山県津山中学校から五高に行ったということは岩波の漱石全集の注で承知していたが、そうすると、東北学院を辞してから津山へ赴くまでの3年はどうしていたのか、という疑問があった。それを『活水学院百年史』は解明してくれた。そして、どんな雰囲気での帝国大学で学んだかも知っていたのである。とともに、漱石書簡(明30・12・17菊池謙二郎あて)に「同氏は検定試験合格者と記憶致し居候が如何」とあるからであろう荒正人の『漱石研究年表』は「奥太郎は検定試験合格者であ



る」と漱石が疑問にしたところを断定している。この「検定試験」はよもや“高等教員”のそれではあるまい。中等教員であれば、文科大学哲学科の選科生として学んだことによって取得しているのである。これも『活水学院百年史』のたまものである。

奥太一郎の津山尋常中学校への赴任は明治29年6月のことである。ここから五高へ行くわけであるが、五高へは漱石の推薦で行ったと承知していた。そこで問題は漱石と奥との接点である。いろいろ考えてみたが、よい思案は浮かばない。で、松山東高(旧松山尋常中学校)の同窓会に漱石と同じ時代に奥太一郎という英語の先生がいなかったか問い合わせた。返事があっていないが、なお、「松山坊っちゃんの会」の頼木富夫氏に話をしておいたから訊ねてみては、ということであった。それで同氏にお訊ねしたところ、漱石に奥を推薦したのは菊池謙二郎であるから明治30年12月17日付けの菊池宛書簡を見るようにとのご教示にあずかった。菊池謙二郎ときいてすぐ思い出すことが二つあった。かつて朝日小事典・江藤淳編『夏目漱石』(昭52・6)の書評を書いたことがあって、その時「菊池謙二郎」の頃があったということと、土井晩翠の書いたものの中にあったということである。しかし、まず指示の手紙を読んだ。その手紙は奥を五高英語教員の候補にということに終始していた。「偕今夏東京表にて御面語のみぎり一寸御評判有之候津山尋常中学校の英語教授奥(泰二郎氏か)は其後矢張同校に奉職被致居候也実は本校にて来年四月頃迄には英語教師一名是非共雇入の運びに立ち至るべきかと存じ候につき只今よりそろそろ候補者選定に着手致し」にはじまり、奥が検定合格者かどうかの質問に終わっている。

菊池は明治28年8月に山口高等学校を辞して、同年9月に開校した岡山県津山尋常中学校の校長に就任した。松山から津山に宛てた漱石書簡(明28・10・8付け)に「先般は御地へ御就職に相成候よし新聞紙上にても散見致し御手紙にて承知致候御校は新設の饗舎のよし定めて何かと御多忙の事と存候其代り随分今迄よりも面白き事も候はんと存候随分御奮励御尽力の程奉冀望候」とあるところである。それから二年足らずで菊池は明治30年4月に千葉県尋常中学校の校長となって津山を去る。

奥太一郎が津山尋常中学校へ英語教師として赴任したのは明治29年6月のことである。五高へ転出のため辞したのが、明治31年3月であるから、菊池と奥とは明治29年6月から明治31年3月まで、10ヵ月、校長と英語の教諭として一緒に勤めていたのである。その間に、奥の学力、人物を見込んで、千葉に移ってから、漱石との歓談のうちに奥のことをほめて話したに相違ない。それが暮れに人事のこと考えた漱

石の頭に浮かんで来たものであったろう。このようにして奥太一郎は、桑畑の中の碓氷英学校で教職に就いてから10年、第五高等学校教授のポストを得ることになったのである。

## 4

漱石が松山尋常中学校を辞し、熊本の第五高等学校に赴任したのは明治29年4月のことである。菅(すが)虎雄の世話による。菅は漱石の2年先輩で独逸文学科の卒業である。2年先輩ではあるが、それを思わせない親しさで交っていた。

漱石は明治33年9月に文部省の留学生としてロンドンに向け出発した。そして、明治36年1月に帰朝したが、再び熊本へ戻る事がなかった。それで五高における漱石と奥との交わりは明治31年4月から明治33年7月までの2年3ヵ月のことである。奥の漱石に対する気持の底にはいつも五高に推薦してくれた恩人ということがあった。それは奥が五高をやめて活水学院に行くことを決意したころの漱石宛書簡によってうかがうことができる。「大兄の熊本行は実は小生の推薦の由それは御手紙にて漸く思ひ出したる位十六年の昔故それも道理かと存候」(大3・2・8づけ)とある。五高を去るにあたって最大級の謝辞をおくられ、とまどっている漱石がここにいる。漱石が終生奥を五高に推薦したことを忘れなかったろうことは、明治36年4月13日づけ漱石書簡に「御承知の菊池謙氏上京明日同氏の為に会を開く筈に候」とあるのによって推測出来る。この会というのは菊池謙二郎が上海の東亞同文書院に赴くのを送る会で、7月2日付けで南京にいる菅虎雄に宛てた「菊謙へヨロシク、アイツ四百元ノ月報デ大得意ダラウ」という書簡がこれに続く。それはともかく、奥―菊池―漱石―五高の関係を漱石が忘れていたはずはなく、奥はそれ程までに漱石に恩義を感じていた。それゆえに奥は職務に精励した。もともとそういう型の人物であったには違いないがよく勤めた。先に引いた『活水学院百年史』に、43年、「在職十二年間無欠勤の故をもって特に賞せられた程、精励恪勤の士であった」とあるのがそれを語っている。漱石書簡に「大兄などの様な真面目な人より見れば」(明36・7・3付け)とか「大兄の如き人は始終一日の如く御勤めにて敬服の至に不堪」(明38・10・20)とかあるのを見ても、漱石の眼にもやはりと思わせるものがある。そういうことから、漱石は留学から帰っても「当地にとどまる事と相成」った時、「目下英語部の状況如何に御座〔候〕や」と外の誰でもない奥に様子伺いの手紙(明36・3・8付け)を書き、4月13日付けの手紙では「英語部内の件其他とも遠山君と共に御尽力被下度」と、遠山参良と二人に後事を託しているのである。そして、



10年余の後のことになるが、奥が五高から離れるときには「小生在熊本中こそ種々御世話に相成御蔭にて左したる公務上の不都合もなく無事に引上げ候段深く感謝致居候」と感謝の意を表している。「公務」といえば奥は漱石が「大兄は依然寄宿の方へ御関係に候や矢張り御多忙の事と存候」（明36・3・8付け）と書いているように、着任後あまり経たない時期から舎監として生徒の訓育にも力を注いでいたようである。（明40・5・29付けの書簡に「公退後」とあるのは「寄宿舎の方へ御関係」がなくなったことであろう）英語教師として、また舎監として、漱石の推薦にはじない存在であった。

『漱石の思ひ出』で夏目鏡子は次のように語っている。

“奥太一郎さんともよく往き来をしてゐましたが、夏目もその頃謡をはじめ、奥さんも同じく謡をやられていたので、謡の会などでも落ちあつてたやうです。夏目の謡の先生といふのは、同じ五高で工学部長をしてられた桜井房記さんが金沢のはうの方で、そこで加賀宝生が御上手とあつて、どういふ拍子で申し出したものか、「紅葉狩」かを教へて戴くことになったのですが、大層質がいいとお賞にあづかつて、自分ではしきりに得意で大きな声を出して呻つてをりました。けれども根っからいい声らしくも思へないので、桜井さんにほめられたつて、そりゃおだてで、なつてゐないぢやありませんかなどと、いつもの悪口の讐でも取る気で浴せかけたものです。すると俺のもそんなにいいと思つてゐるわけではないが、まあ、奥のをきいてみろ。お湯の中で尻が浮いたやうなひよろひよろ声を出すんだから、あれからみればといった具合に、なかなか敗けません。そこで奥さんは奥さん、貴夫は貴夫。人がどうあらうとその声は自慢になりませんよなどと憎まれ口を叩いてをりますと、ある日奥さんがいらして謡が始まりました。私は丁度お湯に入つてゐたのですが、さあ、始まると困つてしまひました。まったく珍妙な謡ひ声なのですが、それよりもすぐとさきの尾籠な批評を思ひ出したからたまりません。たまりかねてお湯の中で手拭を口に当ててきこえないやうに笑つてをりますと、台所でも女中たちが笑ひをこらへてゐるのですが、これも笑ひがとまらず、えらい苦しみをしたことがあります。”

私の交りの上でも漱石夫人鏡子にこんな思い出があつた。家に入入りしただけでなく、旅行も一緒にした。明治32年1月はじめの耶馬溪行は奥と二人であつた。『漱石の思ひ出』には「元日から同じ学校の奥太一郎さんと御一緒に、年来の希望であつた耶馬溪へと旅立ちました」と奥と同行したことを述べて

いる。しかし、これではどんな行程の旅であつたかわからない。それをあらわすものに、1月14日付け狩野亨吉への書簡と子規に送つた「正岡子規へ送りたる句稿 その32 1月」がある。前者には「小生例の如く元朝より鞋かけにて宇佐八幡に賽しかの羅漢寺に登り耶馬溪を経て帰宅山陽の賞噴し過ぎたる為にや左迄の名勝とも存ぜず通り過申候途上豊後と豊前の国境何とか申す峠にて馬に蹴られて雪の中に倒れたる位が御話しに御座候」とある。宿願の耶馬溪は頼山陽が「耶馬溪図巻記」—これであろう。再遊して八絶句を得てはいるが—で絶賛しているのに当てられてか、それほどとは思わなかつたといふ。耶馬溪の感想はこれでわかつたとして、旅程はあまりに疎略である。それを子規への句稿が明らかにしている。しかし、それは句稿に譲り、蛇足を二項に記しておく。「正月二日宇佐に入る 新暦なればにや門松たてたる家もなし」という前書があるが、都市は別としてこのころ地方では旧暦の方が適していた。農が中心であつたから。この年旧暦元日は40日も後の新暦2月10日にならなければ来なかつた。漱石は山陽を好んだように見える。「筑後川の上流を下る」の詞書のある句の中に「奔湍に霰ふり込む根笹かな」「つるぎ洗ふ武夫（もののふ）もなし玉露」の二句が並んでいるが、これは山陽の「下筑後河過菊池正観公戦処感而有作」を頭においていよう。ことに名句の誇れ高い「帰來河水笑洗刀、血迸奔湍噴紅雪」（帰りに来て、河水に笑つて刀を洗えば、血は奔湍に迸（ほとばし）りて紅雪をふく）を意識していよう。とにかく、この旅は同行者がよかつたか、たくさんの句が出来た。

この前年、明治31年の8月下旬と思われるが、狩野亨吉（教頭）、山川信次郎、漱石と新任の木村邦彦とともに小天（おあま）に日帰りて遊んでいる。これは英語科関係教授の木村歓迎のためであつたと思う。この小天行つては『漱石の思ひ出』にゆずる。ともあれ、難儀をともなつた耶馬溪旅行は漱石と二人だけの旅行だったのである。

## 5

奥太一郎を漱石に吹聴し、五高への道を開いた菊池謙二郎は慶応3年1月19日に水戸の天王寺町に水戸藩士菊池慎七郎の次男として生れた。帝国大学文学部国史科を明治26年7月に卒業。卒業生3人のうちの首位。英文科と国史科の違いはあれ漱石とは同期。東大の大学一覧に載せる卒業生名簿では本籍が漱石と同様、北海道となっている。徴兵を避けるためであつたのかどうか。菊池謙二郎については森田美比『菊池謙二郎』（昭51 耕人社）という書もあるので、これだけを記しておく。上に土井晩翠の書いたもので菊池謙二郎の名は知つていたと書いたのは『晩翠放



談一七十七年を語る』(昭23・7 河北新報社)で、二高歴代の校長に就いて述べたところに、「沢柳氏の後を嗣いだ菊池氏〔第三代〕は水戸の人、「弘道館記」に述べられている水戸学の精神を奉ぜる硬骨漢であった。(中略)菊池氏は硬骨が祟って在任一年そこそこに文部省専門学務局長上田万年氏と衝突して免官された。氏が仙台を去る時、仇兆贅の『杜詩詳註』を呈上したことを今思ひ出す。」と語っていることである。この件に関して漱石も心配し、狩野亨吉宛の手紙(明32・1・14付け)に「仙台にての出来事は如何なる性質のものにや云々」と書いている。漱石との交友には見られないところである。菊池のあとを襲ったのが五高校長で、漱石も奥もその下にあった中川元である。着任は明治32年4月である。漱石も奥もとり残されたかたちになった。それにしても漱石の同年同期の菊池が中川の前任者であったとは驚く。子規が叔父大原恒徳に宛てた書簡で「これが同学年中の第一の出世なるべく候」(明31・8・2付け)と感歎したのも、もっともである。

中川は漱石を認め、漱石もこの人のためならと思っていたようである。明治30年4月23日付け正岡子規宛書簡に「当地の校長は是非共居って呉れねば困ると懇々の依頼なりし故宜しい貴公が夫程小生を信じて居るならば小生も出来る丈の事はすべし又教師として世に立つ以上は先づ当分の処御校の為に尽力すべしと明言したり」とある。「人生意気に感ず」というか、「士は己を知る者のために死す」というか、漱石書簡中でも異色である。

漱石は大学予備門のころから中川を知っていたと思われる。『三四郎』の「十一」に広田先生が「憲法発布は明治22年だったね。其時森文部大臣が殺された。君は覚えてるまい。幾年(いくつ)かな君は、さう、それぢや、まだ赤ん坊だ。僕は高等学校の生徒であった。」と語るところがある。この広田先生の年齢は慶応3年生まれの子の漱石の年に見合っている。ということは、漱石は「覚えて」いたということである。覚えている以上、単に「森文部大臣が殺された」という抽象的なことだけでなく、その場の状況も知っていたということである。とすれば、賊から刀をもぎとり斬り伏せたという説もあるくらいの中川元秘書官の名も記憶にあつたろうと思うのである。

漱石は狩野亨吉に五高に来てもらう交渉の手紙(明30・12・7付け)の中で「校長は御存じの通りの長者にて其弊なきにあらねど補佐の為し様にては、随分見込のある学校と存じ候」と書いている。「御存知の通り」とあるのは、狩野は大学を卒業した年の秋、明治24年10月、四高の教授となり、26年1月まで在職した。中川元はその時の校長(明24・10～26・1)であった。次に「長者」とあるが、

“中川先生は名校長であらせられた。校務は一切教頭に委せっきりで、校長室では煙草を吹かしてフランス書を読んでゐられるだけであつた。訓示といふものが、またいつも五分以上はかからぬ至極あっさりしたもので、「諸子が悪い事をすれば叱るぞ。達者で勉強したまへ」と言った調子だ。それでありながら、雄大剛健な校風は、先生の前には、曾て見られないほどの緊張ぶりであつた。学生達は、嚴父を恐れるやうに畏怖してゐる。

最も珍なのは食堂での先生の座談であつた。食堂ばかりでなく、いかなる場合に於いても、先生は座談の名人であつた。食堂に於いては、談少しも教育訓育等に触れず、凡てフランス仕込みの珍談百出のおもしろい浮世話であつた。これを再現する自由を持たないのを遺憾とするが、その洒落な風流さ加減は、時流を抜いた、桁外れの素晴らしいものであつた。”

登張竹風は「ドイツ語懺悔」にこう語っている。登張にとって中川は浪浪の身を二高にとって貰った恩人であるから、多少割引いてきく必要があるかも知れないし、二高と五高の雰囲気と同じだったとは言えなからうが、漱石のいう「長者」振りをうかがわせるに十分な話ではないかと思う。

一枚の写真はこれから帝国大学文科大学選科に入って哲学を専攻しようと希望に燃える奥太一郎青年(数え24歳)壮行のためのものであつた。そこから開ける上のような前途はここに発したといつてよい。

活水学院を辞した奥太一郎は九州学院に行き、大正9年9月から12年3月まで英語と修身を教へていた。院長は五高で同僚であり、英語科の主任であつた遠山参良で、その縁で赴いたものであろう。九州学院以後は不明であるが、昭和14年版『九州学院校友会名簿』によると、昭和3年永眠とのことである。明治3年生、昭和3年没ということになる。

本稿を成すに当って、同志社校友会、岡山県立津山高等学校同窓会事務局長神谷舜仁氏、愛媛県立松山東高等学校同窓会事務局仙波市子氏、千葉県立千葉高等学校菅井修氏、水戸市教育委員会生涯学習課文化振興係、活水学院総務課人事給与係、九州学院同窓会小崎義昭氏の助力をえしました。記して感謝の意を表します。

参考文献

◎第二高等学校史

◎五高五十年史

久保 忠夫プロフィール KUBO, Tadao

1926(大正15)年生まれ  
東北大学(旧制)文学部国文学科卒業  
東北大学文学部大学院特研究生  
東北学院大学教養学部教授  
東北学院大学名誉教授



# ローマ教皇庁教育省局長 ヨゼフ・ピタウ大司教のご来校

2003(平成15)年6月28日(土) ローマ教皇庁教育省局長のヨゼフ・ピタウ大司教が特別講演会のため本学に来校。講演を前に倉松功学長、浅野史郎宮城県知事を交えて会談が行われた。



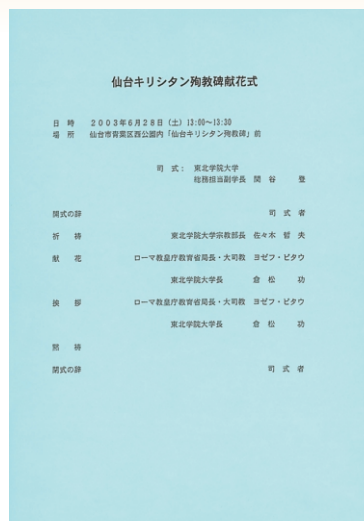
浅野史郎宮城県知事

ヨゼフ・ピタウ大司教

倉松功学長

## 1. 仙台キリシタン殉教碑献花式

(13:00~13:30 青葉区西公園内「仙台キリシタン殉教碑」前)

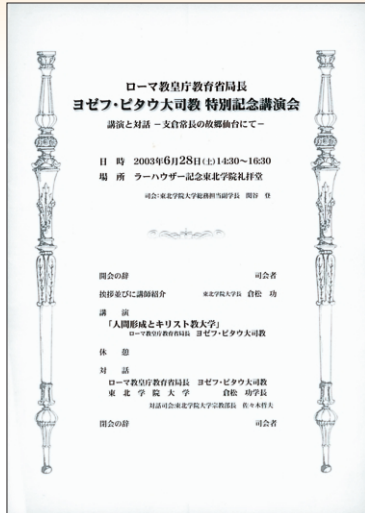


仙台キリシタン殉教碑(仙台市青葉区西公園内)を前に献花式を実施、大司教は倉松功学長とともに殉教碑に献花し、宗教派を超えた世界平和と友好を祈願した。



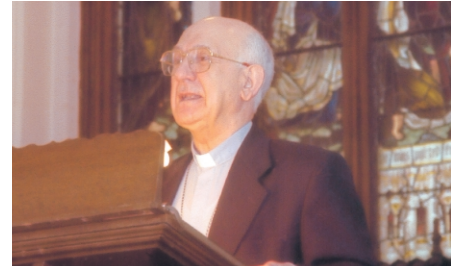


## 2. 特別記念講演会 (14:30~16:30 ラーハウザー記念東北学院礼拝堂)



土樋キャンパス礼拝堂でピタウ大司教による特別講演が行われ、教職員や一般市民など大勢の聴衆が同氏の声に耳を傾けた。続いて、講演内容について、倉松学長とキリスト教大学がもたらす人間形成について公開対談が行われ、改めてキリスト教教育が行うべき、献身犠牲の精神の「学び」が再確認された。

### 講演「人間形成とキリスト教大学」



対話 ローマ教皇庁教育省局長  
東北学院大学

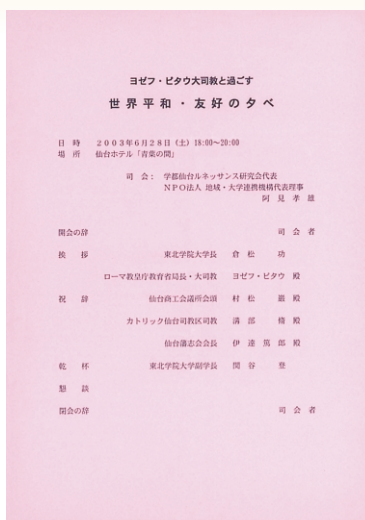
ヨゼフ・ピタウ 大司教  
倉松 功学長



## 3. ヨゼフ・ピタウ大司教と過ごす 世界平和・友好の夕べ

(18:00~20:00 仙台ホテル「青葉の間」)

ピタウ大司教を囲む「世界平和・友好の夕べ」を仙台市内のホテルで挙行し、本学教職員をはじめ仙台藩志会や商工会議所などから約100名の参加者が集い、遠くイタリア・ローマへ思いを馳せる歴史と伝統を交えた意義深い会となった。







第4回ホームカミングデー正門



受付風景  
正門入口総合案内所



受付風景



記念礼拝

司式・説教者：佐々木哲夫宗教部長  
メッセージ：『地の塩、世の光』



同窓生代表あいさつ  
大久保準氏(昭和38年卒業生)



倉松功学院長・学長・同窓会長のあいさつ



2003年度学生懸賞論文入賞者(佳作)  
左から我妻美香(経3)さん・高橋さほり(大学院経済学専攻博士前期課程)さん・倉松功学院長・伊藤正秀(法3)さん・阿部明子(法4)さん



特別講演会  
講演者：高橋長偉氏(昭和38年卒業生)  
宮城県議会議員・同窓会志津川支部長  
演題：『私の今日と東北学院大学』

“懐かしい出会いがそこにある”  
**第4回**  
**ホームカミングデー**  
**『同窓祭』**  
平成15年10月18日(土)





倉松功学長のあいさつ  
司会：渡辺祥子氏（昭和63年卒業生）フリーアナウンサー



大塚浩司副学長による乾杯



石川隆男氏（昭和58年卒業生）

同窓生スピーチ



松岡賜康氏（昭和48年卒業生）



歓談の輪が広がる昼食会場



ホームカミングデー〈同窓祭〉は、東北学院大学・短期大学を卒業された20年目、30年目、40年目、50年目の方々をお迎えして、同窓生相互の親睦と現役学生や教職員との交流を通して親交の輪を広げ、また同窓生と本学との絆を深める願いから土樋キャンパスで行われました。会場のあちこちに懐かしい顔、かお、顔。再会の輪が広がり、参加した一人ひとりが、今日の母校キャンパスに感動し、同時に開催された大学祭も懐かしみ、胸一杯に青春にタイムスリップして楽しんだようです。



シンフォニック・ウィンド・アンサンブル(OB・OG)の「モシー・ジャズオーケストラ」による演奏



歓談の輪が広がる昼食会場



倉松学長とハイ！ポーズ



思い出を後に退場する会員のみなさん



# 東北学院大学文化講演会

— 初の試み、秋田県で開催 —

**東北学院大学文化講演会 2003**



「今、日本が必要としている指導者像」  
講師 加来耕三氏

◆日時：2003年11月29日(土)  
14:00～16:00

◆会場：秋田ビューホテル 4階「光輝」の間  
秋田県秋田市1-18-1 電話0182-254-1111

◆定員：400名 **入場無料**

◆お申し込み方法

お申し込み先  
東北学院大学校務課企画課  
〒980-8511 秋田県秋田市1-18-1  
TEL:0182-254-4024 Fax:0182-254-4034  
e-mail: tohoku@gakuiin.ac.jp

文化講演会の案内チラシ  
ポスターも同デザイン

11月29日(土)、初めての試みになる大学主催「東北学院大学文化講演会 2003」が秋田市の秋田ビューホテルで開催された。

従来までは、各種公開講座や講演会は大学のある仙台市を中心に行ってきたが、平成15年度より地域社会への貢献の一環として宮城県以外の地域を対象に学習機会を提供することになった。当日は、秋田県内から同窓生大勢の方々が来場され、講師の話に聞き入っていた。

講師：加来 耕三(かくこうぞう)氏

演題：「今、日本が必要としている指導者像」



受付は、秋田県各支部TG会の方々のお手伝いをいただきました



講師 加来耕三氏 (作家)



司会は、高田生子氏(昭和44年文英卒) 同窓会秋田県中央支部幹事



多数の同窓生、保護者、一般の方々が参加



同窓会秋田県中央支部より講師に花束贈呈



# 東北学院同窓会主催 100周年行事

## ● 英国イートン・カレッジ聖歌隊公演〔4月15日(火)〕

### 歓迎レセプション

2003(平成15)年4月14日(月)ラルフ・オールウッド氏(主唱者兼音楽監督)を団長に、生徒34人とスタッフを含め総勢42人が来仙。公演を前にSS30ビル30階“ステーカーリー30”において歓迎レセプションが行われ、同校と東北学院関係者間で交流を深めた。



倉松功学院長・同窓会長の挨拶



奥左:倉松功学院長 奥右:ジョージ・ファーシー氏 手前左:田口誠一元院長 手前右:ハザー・ファーシー氏



ホストファミリーと一緒に

### イートン・カレッジ聖歌隊

イートン・カレッジは、1440年にイギリスのヘンリー一六世王により創立された歴史と伝統ある英国名門パブリックスクールです。定員70人の奨学生制度を有し、13歳から18歳の少年1,200人が、24のハウスと呼ばれる寄宿舎で24人のハウスマスターたちの指導の下、全寮制で学んでいる。卒業生はケンブリッジ大学、オックスフォード大学へ進学し、卒業生の中には詩人のグレイや元英国首相のダグラスヒュームなど多数の有名人がいる。聖歌隊員は、英国各地から奨学生制度によって選りすぐられた男子生徒のみで、最高レベルの讃美歌を合唱することで知られている。東北学院中学・高等学校とは2003(平成15)年より交流校となる。

### 中・高公演

4月15日(火)英国の名門パブリック・スクールのイートン・カレッジ聖歌隊を招いたチャペルコンサートが、東北学院中・高礼拝堂で全校生徒を対象に行われた。讃美歌など中心に20曲を熱唱し、荘厳かつ透明感にあふれる美声で魅了。全校生徒からは惜しめない拍手が送られた。



### 同窓会公演

4月15日(火)同窓会百周年記念行事のコンサートとして、土樋キャンパスのラーハウザー記念東北学院礼拝堂において開かれた。同窓生や一般の聴衆約500人が参集し、世界の美声に聴き入っていた。



記念公演



少数合唱 インコグニト・シンガーズ



花束が贈呈され、聴衆に挨拶するラルフ・オールウッド先生

### 県庁訪問

4月16日(水)英国イートン・カレッジ聖歌隊が県内を訪れるのを機に、澄んだ歌声を多くの人に聴いてもらおうと県庁2階講堂でミニコンサートが企画され、聖歌隊一行は県庁を訪問。



記念品の交換



浅野県知事と握手を交わす



合唱「荒城の月」「赤とんぼ」



## ● 第24回TG交流カクテル&ビアパーティー〔7月25日(金)〕

2003(平成15)年7月25日(金) 仙台国際ホテルにおいて同窓会百周年記念事業の一環として、TG交流実行委員会と東北学院仙台同窓会が共催で開催した。当日は、あいにくの梅雨空であったが700人以上の参加者が集った。



パーティー風景



倉松功学院長・同窓会長のあいさつ



若生修同窓会副会長のあいさつ



小林信夫青葉支部長(昭和30年文 英卒)の音頭により乾杯



パーティーも中盤を過ぎ、同窓生の歌手さとう宗幸氏(昭和47年経 経卒)が登場。トークを交えての熱唱はさすがで、参加者を酔わせた。歌の後には、さとう氏からも貴重な100周年記念募金が寄せられた。



さとう宗幸氏の歌、柴生田桂子さんのヴァイオリン、中川賢一さんのピアノの素晴らしいデュオ演奏。



## ● オクタビアン・チャリティ・コンサート〔10月4日(土)〕

2003(平成15)年10月4日(土) 同窓会百周年記念行事の一つとして、土樋キャンパスの礼拝堂で開催された。一昨年来、学生時代の仲間で組織する実行委員会の呼びかけに応じて、声楽家の鈴木雪夫氏(昭和48年経卒)

が腎臓病に苦しむ人々を励ますチャリティコンサートを開いてきたもので、今回で三回目。

※オクタビアン：声楽の世界で、バスより一オクターブ低い声



オクタビアン：鈴木雪夫氏

## ● 松岡佑子氏 記念講演会〔10月23日(木)〕

2003(平成15)年10月23日(木) 同窓会では、世界的なベストセラー小説「ハリー・ポッター」シリーズの翻訳者松岡佑子氏を招き、『ハリー・ポッターとの出会い』と題して同窓会百周年記念の講演会を電力ホールにて開催した。当日は、抽選で選ばれた400組の招待者と、各支部・TG会の関係者で会場はほぼ満席となった。

講演では、「ハリー・ポッター」との出会いから、翻訳に至るまでの苦労話などが話された。終わりには聴衆との質疑応答もあり、一つひとつの質問に率直に細かく丁寧に答えていただいた。



受付風景



開演を待つ聴衆



松岡佑子氏



講演風景



## ● 記念礼拝〔11月15日(土)〕

2003(平成15)年11月15日(土) ラーハウザー記念東北学院礼拝堂において執り行われた。



説教者：佐々木哲夫宗教部長『地の塩、世の光』



記念礼拝



記念礼拝

## ● 平澤大学校音楽学科教授による記念演奏会〔11月15日(土)〕

2003(平成15)年11月15日(土) ラーハウザー記念東北学院礼拝堂において、同窓会百周年を記念し、平澤大学校音楽学科より6名の教授を迎え演奏会が開催された。本学での開催は、2000年7月に本学の大学設置50周年を記念して行われた演奏会に続いて2回目となる。



倉松功学院長のあいさつ



趙基興 平澤大学校総長のあいさつ

### 平澤大学校

韓国の平澤(ピョンテック)大学校は、ソウルの南63キロの平澤市にあり、現在、神学科と音楽科等の4学科(4専攻)と、社会福祉、情報科学、情報デザイン等の7専攻(22コース)があり、学生は約4,700名を擁している。また、大学院は神学、カウンセリング、教育等の6研究科の中に16の専攻があり、学生数は約510名。韓国の中でも比較的長い歴史(1912年創立)と伝統を誇るキリスト教大学である。

東北学院とは、1998(平成10)年5月に「国際教育研究交流協定」を締結し、2002(平成14)年に「学術交流」と「学生交流」に関する協定をそれぞれ締結、現在相互交流が行われている。



ソプラノ・バリトン二重唱  
オペラ「ドン・ジョヴァンニ」より  
「手に手を取って」W.A.モーツァルト

写真右より、バリトン：柳 顯丞氏、  
ソプラノ：吳 恩英氏、ピアノ：  
金 英美氏





花束贈呈



前列左より、趙基興 総長・赤澤昭三理事長・倉松功学院長・金英美副総長  
後列左より、宣在源氏・吳信玉氏・朴相美氏・吳恩英氏・林玉蘭氏・柳顯丞氏



オルガン独奏：吳信玉氏  
「ゴシック組曲」L.バールマン



トランペット独奏：朴相美氏  
「二長調の組曲」G.F.ヘンデル



ピアノ独奏：林玉蘭氏  
「華麗なる大円舞曲」作品22 F.ショパン



## ● 記念式典 & 記念パーティー

〔11月15日(土)〕

2003(平成15)年11月15日(金) 江陽グランドホテルにおいて同窓会百周年記念式典および記念パーティーが行われた。会場には各支部・TG会の同窓生や関係者ら総勢550人が集った。



受付風景



江陽グランドホテル入口



招待客は開場を待つ間、ロビーに展示された東北学院の歴史や同窓会百周年記念行事関連のパネルを興味深く見入っていた。



司会：左／郡 和子氏(昭和54年経 経卒)  
右／高橋英彦氏(昭和51年法 法卒)





会場には各支部・TG会の同窓生や関係者ら総勢550人が詰めかけた。



オープニング 斎藤信二氏（昭和54年経 経卒）による校歌独唱



倉松功学院長・同窓会長による開会のあいさつ



浅野史郎宮城県知事のあいさつ



仙台市長（藤井黎氏）代理 佐藤政一収入役（昭和39年文 経卒）のあいさつ





同窓会より東北学院に100周年記念寄付金贈呈  
左：赤澤昭三理事長 右：倉松功同窓会長



チャリティゴルフ寄付金贈呈 社会福祉法人仙台キリスト教育院へ  
左：大坂謙治院長  
右：若生修同窓会副会長(100周年記念行事実施委員長)



東北学院の歴史・未来を映像で紹介  
BGM：マンドリン演奏  
(本大学プレクトラムソサエティ)



学院中学・高等学校吹奏楽部演奏





乾杯風景



乾杯 村松巖氏(仙台商工会議所会頭)



会場は先輩後輩、支部、TG会、恩師と師弟などグラス片手に交歓の輪が広がっていた。



榴ヶ岡高等学校吹奏楽部演奏



東北学院同窓会の第二世紀への歩みとして  
「Together宣言」  
同窓会100周年記念パーティー実行委員長  
飯岡智氏(昭和44年経 経卒)



ご来賓のお見送り



# 高山セミナーハウスの思い出



豊かな自然に囲まれた高山セミナーハウス(左下)



佐藤 裕治  
佐藤 太枝子

東北学院の校外教育施設「高山セミナーハウス」は、1998(平成10)年3月末で利用休止となり同年8月の前半に解体されました。

高山セミナーハウスが建てられたのは1972(昭和47)年7月で、元リフォームド・ミッション所有の宣教師住宅を譲り受け、七ヶ浜町花渕浜の敷地に移築されたものです。「外観はホワイト・ハウスそのもののように真っ白で、辺りの松林の緑に一段と映え、菖蒲田海岸に近づく道路からはっきり眺めることができ」(東北学院時報第273号1972(昭和47)年7月28日発行)、と紹介されています。木造二階建の内部は一階7室、二階5室(畳敷)で厨房、浴室が増築され約30人が宿泊できました。

この高山セミナーハウスの建てられていた一帯は、昭和15年に学生の夏季の修養道場建設用地として、同窓生の献身的ご尽力と所有者の任侠により購入されたそうです。これは紀元二千六百年記念事業として行われ、昭和42年には隣接地が追加購入され、翌年には東北学院同窓会が松苗2,500本を植え、これが現在でも見事な松林となっております(東北学院時報第152号1941(昭和16)年1月1日発行)。

この海の家として学生・生徒・教職員から親しまれセミナーやゼミ、クラブ合宿にと25年間利用されてきたセミナーハウスも建物の老朽化が著しく、施設の維持、管理も困難な状態となり解体されましたが、いまは非常に懐かしく思い出されます。

自然豊かな海(菖蒲田海岸)が近くに眺める、美しい七ヶ浜に昭和47年7月の夏、高山セミナーハウスがオープンしました。七ヶ浜町道の右側が小豆浜で左側高台の松林にひととき目立つ白い洋館がそびえ建っており、セミナーハウスの建物に入ると風の音、岩にぶつかる荒々しい波の音とあたたかい木の温もり、天井とドアが高く床板は細く短い板の組み合わせになっていて、細工された見事な床でした。建て替えの際、当時管財係の大工さんも大変な作業ではなかったかと思えます。水平線より登る輝く日の出と共に新しい年を迎え、白魚とりの漁り火、やがて海岸に春が訪れ海水浴場周辺に人々が集う声が戻ってくる7月に海開き、夏休みに入り真夏の太陽が照りつけ、海辺には海水浴シーズンが訪れるころ、セミナーハウスは夏の利用が多く入れ替わり、活気のある毎日が続きます。門入口より登



1988(昭和63)年3月 高山セミナーハウス(表側)





高山セミナーハウスから望む日の出



高山セミナーハウス門入口



高山セミナーハウスから見える菖蒲田海岸



玄関



階段



特徴ある床板



階段



2階の部屋

る坂道も当初はデコボコ道から舗装され、海水浴に素足で楽しそうに出かける姿も見られました。中でも数多い利用のロックバンド部は、40人～50人といつも定員オーバーで、ロックの激しいリズムとごう音が真夏の太陽の下、朝から夕方まで時間を惜しんでの練習、活気あふれる演奏が今も懐かしく聞こえてきます。大変上手でした。

数々の楽しい思い出が懐かしく感じます。

また、多くのヘビたちと色々な小動物、中でもタヌキの親子がランチを食べに来ていました。自然に恵まれ、四季の変化、学生たちの食事の変化、生活の変化と潮風さわやかな自然環境の変化が敏感に感じられる25年間でした。

高山セミナーハウスにおいては、諸先生方、職員の方、学生・OB・OGの皆さまのお陰で二人でお仕事させて頂きましたこと深く感謝しております。

海辺はいつも変わらず青い海、輝く日の出が当時と同じく輝き続けております。



1972(昭和47)年 オープン当時



学生たちで活気あふれていた頃の高山セミナーハウス



1988(昭和63)年3月 高山セミナーハウス(裏側)

佐藤 裕治プロフィール SATO, Yuji

1933(昭和8)年生まれ  
東北学院中・高校卒業  
東北学院大学経済学部経済学科卒業  
東北学院大学学生課(高山セミナーハウス)勤務  
退職

佐藤 太枝子プロフィール SATO, Taeko

1936(昭和11)年生まれ  
仙台白百合学園中・高校卒業  
東北学院大学学生課(高山セミナーハウス)勤務  
東北学院大学工学部管財係(体育館)勤務退職



# 2003(平成15)年時事

東北学院に関する時事		東北学院に関する時事			
1月	10日	AO入試B日程第二次選抜・TG推薦入試合格発表	4月	文学部長に平河内健治教授が就任	
	16日	高校推薦入試		経済学部長に遠藤和郎教授が就任	
	21日	榴ヶ岡高校推薦入試		常任理事に関根正行氏が就任	
	28日	交換留学生選考試験		総務担当副学長に関谷登氏が就任	
	30日	中学入試／体育会表彰式		学務担当副学長に大塚浩司氏が就任	
	31日	中学入試合格発表		中・高副校長に渡邊直道氏が就任	
2月	1日	大学一般入試前期日程（～4日）		幼稚園長に長島慎二氏が就任	
	3日	榴ヶ岡高校入試		法人事務局長に佐治勇氏が就任	
	4日	外国人留学生特別入試		財務部長に高橋秀悦氏が就任	
	5日	高校入試		施設部長に伊藤浩吉氏が就任	
	7日	榴ヶ岡高校入試合格発表		庶務部長に大童敬郎氏が就任	
	10日	高校入試合格発表		大学院に外国人客員教授 （夏目新教授・チェルネンコ・ヴォロジミール教授）	
	11日	大学一般入試前期日程合格発表 外国人留学生特別入試合格発表	同窓会総主事に関寛校友課長が就任		
	25日	大学院入試（前期課程）	笹原昌 元文学部教授・高田諭 元文学部教授・川 村幸司 元工学部教授らに名誉教授の称号		
26日	大学院入試（後期課程）	3日	大学入学式		
3月	1日	高校卒業式／第42回榴ヶ岡高校卒業式	9日	第45回榴ヶ岡高校入学式／中学・高校入学式	
	3日	東北学院大学土樋キャンパス総合研究棟起工式 課外活動功労者表彰状授与式／オリエンテーショ ン・リーダー功労者感謝状贈呈式	11日	幼稚園入園式	
	5日	再入学試験、編入学試験B日程、転学部・転学科試験 夜間主コース社会人特別入試B日程	15日	同窓会百周年記念行事 英国イートン・カレッジ聖歌 隊公演（中・高／土樋）	
	6日	大学一般入試後期日程／大学院入試合格発表	28日	川崎町「青根洋館」落成式（青根セミナーハウス旧館 無償譲渡移築）	
	14日	大学一般入試後期日程／編入学試験B日程／転学 部・転学科試験合格発表 夜間主コース社会人特別入試B日程合格発表／原 級止・再入学・復学・研究生発表	30日	中・高平成15年度奨学会総会	
	15日	幼稚園卒園式	5月	15日	創立117周年記念式／永年勤続者表彰式 倉松功新学院長の就任式
	18日	中学・高校 転入試験		17日	榴ヶ岡高校奨学会総会
	19日	中学・高校 転入試験合格者発表		19日	大学文化団体連合会新入生入会式
	24日	大学卒業式／学位記授与式（5人に博士学位授与）		22日	大学体育会結団式
	25日	中学校卒業式		23日	中・高新築移転工事竣工式
	31日	退職者辞令交付式		26日	日本研究夏季講座開講（～6月13日）
4月	1日	役職者等辞令交付式／新任職員辞令交付式 理事長に赤澤昭三氏就任 学院長及び同窓会長に倉松功大学長が就任	31日	第54回対青山学院大学総合定期戦（～6月2日：本 学が総合優勝）	
			6月	7日	高校総体（～9日）高校バスケ優勝 榴ヶ岡高校馬術個人で初優勝 全国中学生レスリング選手権大会にて三本菅正太 君が優勝



東北学院に関する時事		東北学院に関する時事			
6月	13日	日本研究夏季講座修了式 第49回対北海学園大学総合定期戦（～15日：本学が総合優勝） 第54回東北地区大学総体 男子は総合二連覇達成（～7月1日）	10月	4日	同窓会百周年記念オクタビアン鈴木雪夫チャリティ・コンサート開催
	26日	大学院博士前期課程（修士課程）入学特別選考会		9日	編入学試験（A日程）
	28日	ヨゼフ・ピタウ大司教特別講演会		10日	韓国・大仏（ダブル）大学校との国際交流協定調印
7月	2日	特待生・優等生等表彰式（土樋）	11月	11日	多賀城キャンパス 工学部祭（～12日） 泉キャンパス大学祭（～13日） 土樋キャンパス大学祭（～19日） 編入学試験（A日程）合格発表
	3日	2003年度派遣留学生歓送会／2003年度派遣交換留学生オリエンテーション／特待生・優等生等表彰式（泉）		17日	第4回ホームカミングデー（同窓祭）
	4日	特待生・優等生等表彰式（多賀城）		23日	同窓会百周年記念 松岡佑子氏講演会
	7日	榴ヶ岡高校 転・編入学試験		25日	第43回学生会夜間連ヨット部Y15級全日大会で4年連続優勝
	11日	中学・高校 転入試験		8日	榴ヶ岡高校オープンキャンパスⅡ
	17日	高校 特待生・準特待生伝達式、月浦育英会奨学生伝達式／授業料減免交付式			14日
25日	東北学院同窓会百周年記念行事 TG交流カクテル&ビアパーティー開催	15日	東北学院同窓会百周年 記念礼拝・平澤大学校演奏会・記念式典・祝賀パーティー		
26日	法科大学院説明会	21日	大学推薦入試、AO入学試験（A日程）、夜間主コース社会人特別入学試験合格発表		
8月	1日	東北学院大学オープンキャンパス（泉・多賀城） 2003年度アーサイナス大学夏期留学生出発中・高教職員修養会、講習（～9日）	27日	法科大学院設置 文部科学省から正式に設置許可	
	2日	第22回対北海学園大学二部総合定期戦／法科大学院説明会	29日	東北学院大学文化講演会 秋田県で開催 講師 加来耕三（かくこうぞう）氏	
	5日	東北学院大学・仙台市教育委員会と連携協力に関する覚書締結式	12月	5日	泉キャンパスクリスマス
	9日	第26回対青山学院大学二部交流定期戦		10日	日本研究秋期講座修了式／大学クリスマス礼拝（土樋・泉）
	21日	韓国 釜山にて日韓親善 少年レスリング親善試合（～26日）		11日	大学クリスマス礼拝（多賀城）
	31日	平成15年度法科大学院適性試験（土樋）		12日	公開東北学院クリスマス礼拝
9月	3日	大学教職員修養会（～4日）		15日	第15回 泉キャンパスクリスマス礼拝
	5日	榴ヶ岡高校 榴祭（～6日）		16日	幼稚園クリスマス
	6日	中学・高校 学院祭（～7日）	18日	AO入試B日程第一次選抜、TG推薦入試	
	25日	オープンカレッジ（～11月27日）	19日	榴ヶ岡高等学校クリスマス	
	29日	大学 9月期卒業・学位記授与式	20日	中・高クリスマス礼拝	
				24日	職員クリスマス礼拝 AO入試B日程第一次選抜



# 東北学院資料室規程

## (設置および名称)

第1条 本院に、東北学院資料室(以下「資料室」という。)を置く。

## (目的)

第2条 資料室は、本院に関する歴史を将来に伝承するとともに、「建学の精神」に関連する資料を収集・保存・展示し、本院の発展に資することを目的とする。

## (事業)

第3条 資料室は、第2条の目的を達成するために、以下の事業を行う。

- 一 資料の収集、整理、および保存に関すること。
- 二 資料に係る刊行物の編集および出版に関すること。
- 三 資料の展示および公開に関すること。
- 四 資料の閲覧および貸出に関すること。
- 五 資料に係る情報の提供に関すること。
- 六 その他、必要と認められる事業に関すること。

## (運営委員会の設置)

第4条 資料室の事業を運営するため、東北学院資料室運営委員会(以下「運営委員会」という。)を設ける。

## (運営委員会の構成)

第5条 運営委員会は、次の者をもって構成する。

- 一 学院長
  - 二 総務担当副学長、宗教部長、総務部長、総務部次長、総務課長
  - 三 中学・高等学校副校長1名、榴ヶ岡高等学校副校長、中学・高等学校事務長、榴ヶ岡高等学校事務長、幼稚園教頭
  - 四 法人事務局長、庶務部長、庶務課長、広報課長
- 2 運営委員会は学院長が招集しその議長となる。
- 3 運営委員会のもとに、必要に応じて実務委員会を設けることができる。  
実務委員は、運営委員会の議を経て委員長が任命する。
- 4 運営委員会の事務は、広報課が行う。

## (資料室の管理・事務)

第6条 資料室の管理・事務は、広報課がこれを行う。

## (規則の改廃)

第7条 本規程の改廃は、運営委員会の議を経て理事会が行う。

## 附則

本規程は、2001(平成13)年4月1日から施行する。

## 附則

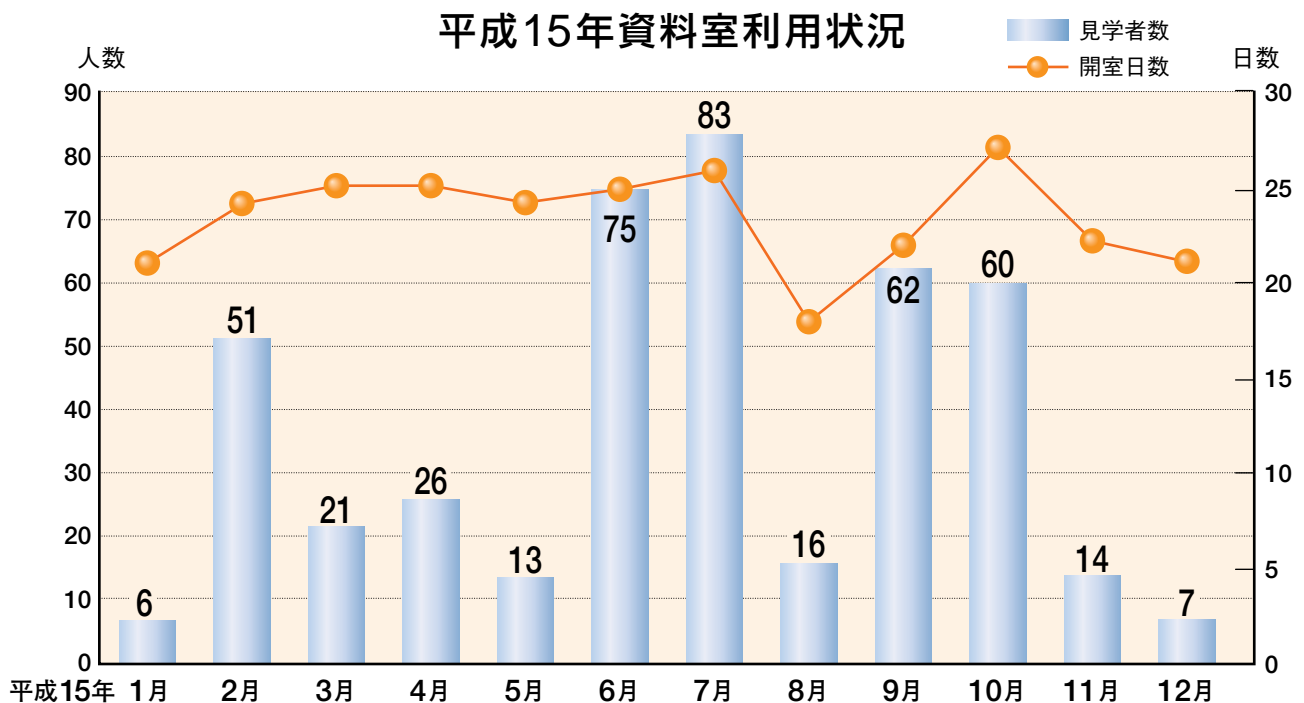
本規程は、2003(平成15)年4月1日から一部改正施行する。



# 平成15年資料室来室状況

2003(平成15)年

- 2月 1~4日 大学入試付添い父母 (16名)
- 2月13日 東北学院高校・榴ヶ岡高校推薦入学誓約式参列者父母 (22名)
- 4月 1日 宮城学院関係者 (4名)
- 5月30日 神戸大学関係者 (3名)
- 5月31日 青山学院大学関係者 (1名)
- 6月 5日 全国図書会議参加者 (6名)
- 6月10日 宮城学院資料室関係者 (2名)
- 6月13日 経済資料協議会総会参加者 (18名)
- 6月24日 川合信水の関係者 (4名)
- 7月 1日 福島県の県立高校父母の学校見学 (30名)
- 7月 3日 神戸女学院関係者 (13名)
- 7月 7日 韓国 大仏大学関係者 (5名)
- 7月15日 TG50年会 (11名)
- 8月 1日 北海学園大学関係者 (2名)
- 9月16日 志田郡成人大学 (50名)
- 9月24日 神戸女学院関係者 (1名)
- 9月25日 東北放送関係者 (1名)
- 9月29日 広瀬河畔教会 (東京在住者3名)
- 10月18日 ホームカミングデー参加者 (50名)





## 東北学院資料室運営委員会

委員長	学院長	倉松 功
委員	副学長	関谷 登
	宗教部長	佐々木哲夫
	総務部長	飯土井公洋
	総務部次長	高橋 征士
	中学・高等学校副校長	松本 芳哉
	中学・高等学校事務長	荒 孝夫
	榴ヶ岡高等学校副校長	久能 隆博
	榴ヶ岡高等学校事務長	高橋 正博
	幼稚園教頭	多田 征子
	法人事務局長	佐治 勇
	庶務部長	大童 敬郎
	広報課長	工藤 勝義



### 資料室利用案内

東北学院資料室は、広く一般の方々にも開放しております。

#### 開室時間

#### 授業期間中

月～金 10:30～16:00

但し、昼休み時間(12:30～13:30まで)を除きます。

土 10:30～12:00

(祝祭日はお休みいたします。)

#### 長期休暇(春休み・夏休み・冬休み)中

月～金 10:00～15:30

但し、昼休み時間(12:30～13:30まで)を除きます。

(土・祝祭日はお休みいたします。)



### 広報課

広報課長	工藤 勝義
広報課長補佐	吉田 知致
	早坂 友行
	渡辺 洋樹
	平田 三枝

発行日 2003(平成15)年12月31日

編集 東北学院資料室運営委員会

発行 学校法人 東北学院

〒980-8511

仙台市青葉区土樋一丁目3番1号

TEL.022-264-6423 FAX.022-264-6478

【URL】 <http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/>

印刷 東北堂印刷株式会社